

戦争と孤児

金田 茉莉

東京大空襲と孤児

1945年3月、学童疎開していた小学校（国民学校）6年生の児童が卒業のため東京へ戻ることになりました。私は小学3年生でしたが、母から「家族で疎開しますから6年生と一緒に帰してください」と先生にお願いしてありましたので、私も6年生と共に、3月

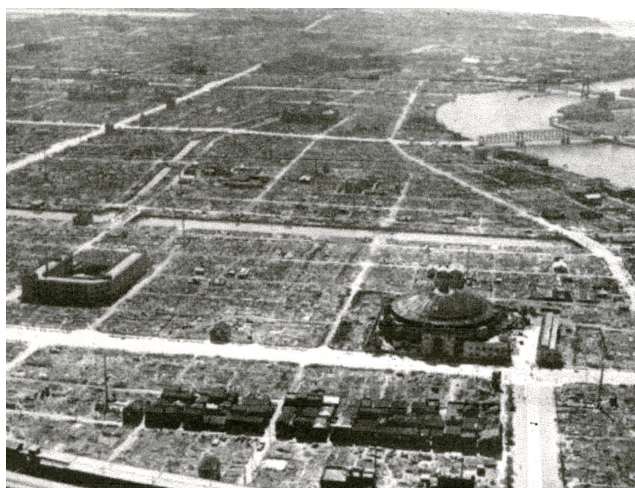
9日夜、宮城県の白石駅から夜行列車に乗り込みました。翌10日朝、上野駅に着きますと、密集していた家々のすべてが地上から消え、見渡す限りの焼け野原がどこまでも続いていた。生徒が夜行列車に乗っている間に東京下町は空襲をうけ、家々も、人間も、八方猛火に包まれ、燃え尽き、焼け野原には黒焦げになった遺体が至る所に転がっていました。9歳の私は頭の中が真っ白になり、母たちの無事だけを念じていましたが、母と姉妹はこの空襲で殺され（父は病死）、私一人だけが残され孤児になりました。

後年になってから知りましたが、この3月10日の空襲は、世界史上最大の空襲だったのです。一緒に帰

京した浅草富士小6年、約2000人の内、私と同じく孤児になった子は42人。宮城県に疎開していた3年から5年までの孤児は66人。富士小1校だけで100人以上の孤児が生じたのです。3月10日の空襲で下町の墨田区、江東区、台東区のすべての学校で非常に多くの孤児が生じ、墨田区の中和小学校では200人も孤児が生じたと聞きました。その他、4月、5月の東京空襲でも、全国各地の空襲でも疎開中の孤児が多く生じました。孤児たちには、その直後から、想像を絶する過酷な運命が待ち受けていました。

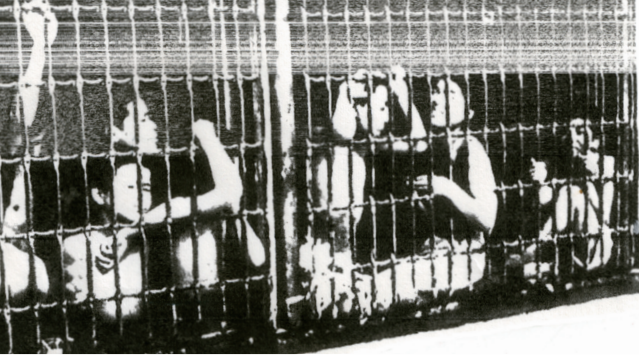
12万3千500人の戦争孤児

私は50歳になってから孤児調査を始めました。戦争孤児は全国で12万3千500人いました。1948年アメリカ占領軍の命令で、厚生省が「全国孤児一斉調査」を行なったのですが、国はその孤児資料を隠蔽してしまい、戦後50年後に、ある所で見つかりました。このデータを年齢別にみると、小学生の年代の孤児数が約10万人と突出していました。この年代は、学童疎開をしていた年代です。都市に住む小学生以下の児童が「次期戦闘員温存のため」と、国の命令で親・家族と引き離され、地方へ、全国で約90万人の児童が根こそぎ疎開していました。この疎開中に都市が空襲に襲われ、家が焼かれ、親が殺されて、子どもだけが取り残されました。学童疎開が孤児をつくったといえます。敗戦後、疎開児



空襲で焼け野原になった東京・墨田区、江東方面。右は隅田川（1945年3月。アメリカ航空写真 写真提供：筆者。以下同じ）

童は親元へ引き取られていきましたが、家も親もなく、帰るところのなくなった孤児たちは、東京だけで数万人と推測されています。国策として学童疎開を推進してきた文部省は、学童疎開中の孤児を、困窮した親戚へ押し付けたり、養子にだしたり、孤児の救済に予算を出さない措置をとりました。責任逃れのため、校長や関係者に箝口令をひき、孤児の資料を戦後すぐに焼却して、証拠を隠滅してしまったことが、50年以上過ぎてから、様々な証言、事例、資料などから明らかになってきました。文部省は大量に発生した学童疎開中の孤児を、まるでいなかったかのように、歴史から抹殺して闇に葬ってしまったのです。養子に出された子どもはごく一部を除き、大人に利用され、人身売買され奴隷同様にさ



れたり、買春宿に売られた女子もいました。親戚へ預けられた子も、食糧難の時代でしたから邪魔者扱いで、親戚中を転々と回されます。食べ物を与えられなかったり、酷使されたり、虐待され、餓死、病死、自殺した子も多くいました。どの子も「おかあさん！」と呼びながら死んでいきました。

巷にあふれる浮浪児

敗戦後から巷に10歳前後の浮浪児があふれました。親戚や養子先から虐待された孤児たちが地方から家出してきましたが、東京は焦土になっていました。彼らは上野駅地下道でごろ寝します。顔も手足も汚れ放題、垢まみれ、シラミだらけ。ボロボロの衣服をまとい、鼻も曲がりそうな臭いにおいがするため「乞食」「バイ菌」「野良犬」と呼ばれて、一般の人たちから忌み嫌われました。食べ物にはゴミ箱をあさっても無い時代でした。毎日、上野駅地下道では、飢死、凍死する子が相次ぎました。

見かねた民間の篤志家が、私有財産を売って孤児施設をつくってくだ

さったのですが、何しろ浮浪児は約4万人といわれるほど多くいましたから、焼け石に水です。孤児施設の絶対数が不足していました。アメリカ占領軍から「汚いから浮浪児を一掃せよ」と命令された国は、収容施設がないため、浮浪児をトラックで運び、「山奥に棄てられた」という孤児証言もあります。また、浮浪児を捕まえると、逃げ出さないようにハダカにして鉄格子の中に閉じ込めました。盗みをする浮浪児は犯罪者にされ、刑務所よりもっと悪い環境で食べ物もろくに与えず、殴る蹴るは日常茶飯事に行なわれていたそうです。

親は「子どもだけは、国が助けてくれる」と信じて、可愛い我が子を手放し、学童疎開させたのです。この哀れな姿を、あの世からどのように眺めているでしょうか。

浮浪児になったMさん(当時11歳・小5・男)から直接、聞いた話です。

「だれが浮浪児なんかになりたいもんか。何日も食べられない。お腹が空いてたまらなかった。食べ物盗むと大人にコン棒でメチャクチャに殴られるんだ。仲間が大勢死んでいった。明日は自分も死んでいるかもしれない。絶望だけだった。戦争で両親さえ殺されなければ、こんな惨めな姿にならなかった。何が天皇の赤子だ。神の国だ。大人に騙された。大人が憎い。戦争が憎い。親を返せ！」

平和憲法を死守

戦後日本は旧軍人・軍属には現在までに、53兆円の補償金が支給されています。私の腑に落ちないのは、岸元首相などA級戦犯容疑者はじめ戦争指導者に高額金が支給されていることです。無謀な戦争を起こし戦争を長引かせ、無辜の民が大量殺害されたことに責任はないのでしょうか。空襲犠牲者には一円の支援ありませんでした。孤児たちにも「かつてに生きる。かつてに死ぬ」でした。国から放りだされた孤児たちです。小学生以下の子どもはどのように生きていけばよかったのでしょうか。空襲死者や子どもの死者たちの追悼碑もあります。自然災害でない戦争では、国にとって都合の悪いことはすべて隠されてしまいます。「日本は隠蔽大国だ」とつくづく思い知りました。

戦争とは「命が消耗品になる。一部の人だけが得をする。弱者は切り捨てられる」ことなのです。私たち孤児は戦争の残酷さを骨の髄まで体験してきました。戦争の実態を知らない人、知ろうとしない人ほど、戦争を美化したプロパガンダに騙されるようです。戦争になれば、どこで誰が犠牲になるかわかりません。そして必ず孤児が生じます。私は孫の幼い顔を眺め「この子が孤児になったら？」と思うと恐怖に駆られます。未来の子どもたちの命を守るために「平和憲法九条」を絶対に死守しましょう。

(かねだ・まり/戦争孤児の会代表。近著に『終わりになき悲しみ』コールサク社刊、1500円+税)